現場の声…訪問看護から

訪問看護事業部

看護部長　坂田理恵

私は、初めから訪問看護師になりたくてなったわけではありません。長年、大学病院で勤務してきたため、「一人で訪問し、医師のいない場面で一人で判断しなければならない」そんな事が出来るだろうかと不安でした。そんな私も、弊社で訪問看護に従事して早6年が過ぎました。

今では、病院に戻りたいとは、少しも思わなくなりました。なぜ…？病院では、毎日の業務をこなす事だけで、病気は見ていても患者様自身を見ていなかったように思うからです。それどころか、一方通行のケアだったんじゃないかとさえ感じます。

訪問看護は、30分～90分の間、その方だけとじっくり話をしながら、または触れ合いながらケアをさせていただくことができます。ケアをしていると、病院では見る事が出来ないリラックスされた表情で安心されて処置を受けていただけることがほとんどです。また、実際に、ご利用者様の日常生活を見せていただく事で、その方の本当に必要なケアが良くわかります。そしてそれを理解し、共有していく事から、信頼関係が深まります。

その方が生きてこられた人生だったり、その方のご家族やその方を取り巻く環境にまで接することができた時、自己満足では終わらない本当の意味での看護が実践できるのだと思います。

病院でかけられた「ありがとう」と在宅の現場での「ありがとう」は、重みが違い、時には涙がこみ上げる事もあります。いろいろな生活の場に入り、人間としても成長させていただいております。屋外になかなか出られなくなっているご利用者様や、独居生活の方より、来る日を待っていただけている時は、本当に嬉しく、この感情は病棟勤務では味わえませんでした。

訪問看護師は、その方の機能回復を支援するだけでなく、その方がその方らしい人生を送っていただけるように支援しなくてはなりません。ご利用者様やそのご家族と一緒に、在宅生活を考えていける特別な存在だと思います。ご利用者様と近い存在になれる、必要だと思っていただける・・・

だから、

私はやめられません。